
スーパーヒーロー&ヒロイン大戦I F ~ S H H W I F ~

キシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーヒーロー&ヒロイン大戦IF\SHHWIF\

【Nコード】

N1541Q

【作者名】

キシ

【あらすじ】

異世界を巻き込んだ戦いが今！
立ちあがるは、異世界の英雄達！！

今、作品の枠を超え彼ら、彼女らが手を取り敵に太刀向かう！

さあ！お前の罪を数えろ！！

BGM集（前書き）

マジで使いたいBGMのリストです。

BGM集

使用BGM集です。

＼リリカルなのはAS＼

- ・「ETERNAL BLAZE」(汎用BGM)
- ・「BRAVE PHOENIX」(イベント戦闘)

＼ロックマンX3＼

- ・「One More Time」(汎用BGM)

＼SDガンダムフォース＼

- ・「ココロオドル」(汎用BGM)
- ・「ラブ&ピース」(後期汎用BGM)

＼仮面ライダーW＼

- ・「W-B-X」W-Boiled Extreme」(汎用BGM)

- ・「Cyclone Effect」(汎用・必殺技時)
- ・「Nobody's Perfect」(イベント時)

＼仮面ライダー555＼

- ・「Justiφ's」(汎用BGM)
- ・「Dead of alive」(汎用・必殺技時)

・「The People with no name」(汎用・必殺技)

↳フレッシュプリキュア

・「Let's!フレッシュプリキュア!」↳Hybrid
river for the Movie」(汎用BGM)

↳NAMCO x CAPCOM

・「すばらしき新世界」(イベント・覚醒時)
・「ゆらぎの街のアリス」(汎用BGM)

↳テイルズオブデイスティニー

・「夢であるように」(イベント・覚醒時)
・「Lion Fate of a Fencer」(汎用BGM)

・「Bare its fangs - ARRANGE」(汎用BGM)

↳モンスターハンターポータブル2G

・「英雄の証」(汎用BGM)
・「太古の律動」(リオレウス・リオレイヤ戦)
・「牙を剥く轟竜」(ティガレックス戦)
・「闇に走る赤い残光」(ナルガクルガ戦)
・「舞い降りる伝説」(ミラボレアス戦)

- ・「炎国の王妃」(ナナテスカトル・テオテスカトル戦)
- ・「深い森の幻影」(オオナズチ戦)
- ・「嵐に舞う黒い影」(クシャルダオラ)
- ・「閃烈なる蒼光」(?????戦)

↓SDガンダム・三国伝↓

- ・「Justice・伝説を刻め！」(汎用BGM)

↓仮面ライダーディケイド↓

- ・「Journey through the Decade」(汎用BGM)

- ・「Ride the Wind」(ディケイド専用)
- ・「Treasure Sniper」(ディエンド専用)
- ・「仮面ライダークウガ！」(クウガ専用)

これが作者の中で使いたいBGMですね。
曲は分かるけど、曲のタイトルが分からない曲が多いのでそう言った曲は入れてません。

本当はもう少し入れたかったのですが、小説中だと入れられないので、読者様の脳内で再生してくださいれば幸いです。

まあ正直、戦闘BGMとしてはどうかと思うものは多々ありますが、これはあくまで『スパロボちっくな何か』なので、戦闘BGMとして使わなければいい訳です(開き直り)

ネタばれ上等！！な人だけでござ。

『お前の小説になんか期待してねえ』 　な人だけどうぞ

覚悟は良いですね？（ネタばれの）

ネタばれの可能性があります。先に進みますか？

・はい

・いいえ

隠しトラック

サプライズゲスト編

〔侍戦隊シンケンジャー〕

- ・「侍戦隊シンケンジャー」(汎用BGM)
- ・「シンケンレッド 一筆奏上」(シンケンレッド専用)
- ・「青浪世直し」(シンケンブルー専用)
- ・「ナデシコ真剣 花吹雪」(シンケンピンク専用)
- ・「シンケンデイズ Never give up 道中」(シンケングリーン専用)
- ・「はんなり めっちゃ武士道ガール」(シンケンイエロー専用)
- ・「一貫献上! シンケンゴールド」(シンケンゴールド専用)
- ・「侍ファーストラップ・銀幕BANG!!!」(汎用BGM)

〔大神〕

- ・「妖怪退治」(汎用BGM)
- ・「ヤマタノオロチ退治・其一、二」(ヤマタノオロチ専用)
- ・「勇者オキクルミ」(オキクルミ専用)
- ・「双魔神 モシレクチク・コタネチク退治」(双魔神専用)
- ・「双魔神の魔術」(双魔神専用)
- ・「常闇ノ皇」(常闇ノ皇専用)
- ・「大神 白野威」(イベント戦時)
- ・「Reset ありがとうバージョン」(イベント戦時)
- ・「太陽は昇る」(アマテラス専用)

〔仮面ライダー000〕

- ・「Anything Goes!」(汎用BGM)
- ・「Regret nothing Tighten Up」(タトバコンボ専用)
- ・「Got to keep it real」(ガタキリバコン)

ボ専用)

・「Ride on Right time」(ラトラータコンボ専用)

・「Sun goes up」(サゴゾコンボ専用)

・「Time judged all」(タジャトルコンボ専用)

・ここまで見た読者様へ

何が言いたいか分かりますね? 出ますよ。出しますよ、上の3タイトル。

個人的妄想設定・ゲームになったら編（前書き）

多少のネタばれ有り。でも気にしなあい

個人的妄想設定・ゲームになったら編

ユニットスキル

汎用

・切り払い

物理属性の攻撃を切り払いダメージを0にする。発動確率は技能レベルと敵との技量差で決定する。

・撃ち落とし

物理属性射撃の攻撃を打ち落としダメージを0にする。発動確率は技能レベルと敵との技量差で決定する。

・シールド防御

発動時、受けるダメージを40%にする。発動確率は技能レベルと敵との技量差で決定し、防御を選択した時は必ず発動する。特殊防御。

・治療

シヤマルなどの一部のキャラが使用可能。味方キャラのHPを回復できる

・変身、フォームチェンジ、

各キャラ固有の形態に、外見、ステータス、技を変更出来る。

例・アクセルフォーム、ブラスタフォーム、カメンライド、コンブリートフォーム、竜帝、雀瞬、虎暁、

・特殊回避

一部の味方ユニットが習得。敵より技量が高い時、攻撃を完全回避

できる。

例・クロックアップ、アクセルフォーム、分身など

- ・士気高揚

2ターン目移行のターン開始時より、気力2上昇。

- ・援護攻撃

援護攻撃が可能になる。回数はスキルのレベル分

- ・援護防御

援護防御が可能になる。回数はスキルのレベル分

- ・シルバリー

チーム内の女性キャラに応じてステータス上昇。

- ・幸運、激運

敵撃退時の資金が1.5倍（幸運）、激運は2倍。ユニットスキルと併用可能。（幸運と激運の併用は不可）

- ・ツンデレ

乾巧（仮面ライダー555）などの一部のキャラが習得。援護攻撃時のダメージ減少率が無くなる。

- ・ラーニング

戦闘時、小隊員でも経験値・PPが小隊長の場合と同じく100%入手できる

- ・軍師

周辺にいる味方チームの命中率・回避率が上昇します

- ・カウンター

反撃選択時に攻撃側ユニットより先に攻撃をしかける。レベルが高いほど発動確率がアップする。

- ・底力

HPの減少に応じて命中率・回避率・防御・クリティカル率が上昇する。レベルが高いほど効果が高い。

- ・見切り

気力130以上で最終命中率・回避率・クリティカル率が10%上昇する

- ・気力限界突破

気力上昇の上限が170になる

- ・SP回復

精神ポイントが毎ターン10ポイント回復する

- ・SPアップ

最大精神ポイントが技能レベル毎に6ポイント上昇する。

- ・ガード

気力130以上で相手からの最終ダメージが80%となる

- ・治療技能

治療コマンドを使用した際、HP回復量が1.5倍になる

<三国伝固有>

・三侯の魂

劉備ガンダム、曹操ガンダム、孫権ガンダム、呂布トールギスのみ習得。『暗黒玉璽』の効果を受けない。必殺属性の技の威力10%上昇

・天の刃

馬超ブルーデイスティニー、猛獲ガンダムのみが習得。『暗黒玉璽』の効果を受けない。

・竜輝宝

関羽ガンダム、関平ガンダム、張飛ガンダム、趙雲ガンダム、黄忠ガンダム、馬超ブルーデイズティニーのみ特定の条件下で習得。『暗黒玉璽』の効果を受けない。最終ダメージと命中率が10%上昇。馬超のみ後半の効果のみ適用。

・雀瞬の炎

曹丕ガンダム、徐晃サーペントのみ習得。『暗黒玉璽』の効果を受けない。

・暗黒玉璽

このスキルを持っているユニットが居る時、自軍ユニットの行動開始時に気力が-2される。敵のみ習得。

・闇の力

馬超ブルーデイスティニーが習得。『竜輝宝』を覚えた事が無い場合のみ発動。HP50%以下になると暴走。格闘系の技のダメージ

20%上昇。

<モンスターハンター固有>

・怒り

一定値以上のダメージを受けた時、命中値以外の全ステータスが10%上昇。命中は-5%される。効果は3ターン続く。モンスターハンター系敵ユニットのみ習得。

・閃光玉

敵ユニットに対してのみ使用可能。2ターンの間攻撃不能状態にする。ただし、『怒り』の条件を満たした場合『怒り』の効果が優先され、攻撃不能状態が解除される。モンスターハンター系プレイヤークラスのみ習得。

<tiger&Burney固有>

・ハンドレットパワー

ワイルドタイガー、バーナービーのみ習得。命中以外の全ステータスが2倍になる。5ターンのみ有効。一回のステージ中一回のみ使用可能。

・ハンドレットパワー（減退）

ワイルドタイガーのみ習得。『ハンドレットパワー』と同じ効果。3ターンのみ有効。一回のステージ中一回のみ使用可能。

<SDガンダムフォース固有>

・ソウルドライブ

キャプテンガンダム、プロフェッサーガーベラ、コマンダーサザビーのみ習得。気力150以上で発動。全ステータスが20%上昇。

<仮面ライダーディケイド固有>

・世界の破壊者

敵の特殊防御スキル全ての影響を受けない。味方ユニットが戦闘不能になる度、技の威力が0.5%ずつ下がる。

<仮面ライダーW固有>

・星の本棚

フィリップのみ習得。最終回避値、最終命中率が15%上昇。また精神コマンド『偵察』を使わなくても敵のステータスを調べる事が可能。仮面ライダーWエクストリーム時のみ上昇値が20%に上がる。

・エターナルレクイエム

仮面ライダーエターナルのみ習得。仮面ライダーW、仮面ライダーアクセルの全ての特殊スキルを無効化する。(フォームチェンジ含む)一定量のダメージを受けると効果無効。

<フレッシュプリキュア固有>

・幸せゲットだよ！

桃園ラブ／キュアピーチ・キュアエンジェルのみ習得。気力無効化系技、スキルの無効化。敵撃退時の資金が1・2倍になる。（その他のスキルと併用可能）味方が戦闘不能になった時の気力減少値が二倍。

・あたし完璧！

蒼乃美希／キュアベリーののみ習得。攻撃回避時、攻撃命中時の気力上昇値が+1。クリティカル発生率が5％上昇。

・私、信じてる！

山吹祈里／キュアパインのみ習得。戦闘参加中永続発動。味方の回復量が上昇。

・精一杯、頑張るわ！

東せつな／キュアパッションのみ習得。習得経験値が1・5倍。チーム全体に効果有り。

・転生の幹部

ウエスター／西 隼人・サウラー／南 瞬のみ習得。援護防御時の自身のダメージが減少。

<ハートキャッチプリキュア固有>

・心の種

キャアブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトのみ習得。
気力減少無効、状態異常無効化。

・光の使者・伝説の戦士

イベント参戦プリキヤア系ユニットのみ習得。上記のプリキユア系
スキル全ての効果。

・希望の宝石

イベント時プリキヤア系キャラのみ習得。毎ターン（敵味方問わず）
開始時、HP、EP10%回復。状態異常無効化。味方戦闘不能時
気力-150

<ケロロ軍曹固有>

・ガンプラ最高！！

ケロロ軍曹/ケロロドラゴンのみ習得。ガンダム系ユニットとチー
ムを組んだ時の援護攻撃時のダメージが1.5倍になる。

精神コマンド

・熱血

一度だけ敵に与えるダメージの効果が2倍になる

・魂

一度だけ敵に与えるダメージが2・5倍になる

・士気

次の戦闘でチーム全員の攻撃がクリティカルになる。熱血・魂と効果は重複しない

・ひらめき

一度だけ敵の攻撃を完全回避

・直感

必中、ひらめきが同時にかかる

・不屈

一度だけ受けるダメージを10にする

・鉄壁

1ターンの間、敵によるダメージを1/4にする

・集中

1ターンの間、命中率と回避率が30%アップ

・必中

1ターンの間、命中率が100%になる

・感応

1ターンの間、指定した味方ユニットの命中率が100%になる

・加速

一度だけチーム移動力を+3、移動するまで効果は持続

- ・覚醒

自チームの行動回数を1回増やす。重ねがけは無効

- ・根性

使用キャラのHPを最大HPの30%回復

- ・ド根性

使用キャラのHPを最大値まで回復

- ・信頼

指定した味方ユニット1体のHPを2000回復

- ・友情

指定した味方小隊全機のHPを全回復

- ・絆

マップ中の全ての味方ユニットのHPを最大値の50%回復

- ・期待

指定した味方1名のSPを50回復

- ・気合

気力を10上げる

- ・気迫

気力を30上げる

- ・激励

使用チーム全員の気力を5上げる

・てかげん

敵にとどめを刺さずにHPを10だけ残す。自分より技量の低い相手にのみ有効

・休息

指定した味方ユニット1体のエネルギーと弾数を全回復

・直撃

相手の防御技能とサイズ差によるダメージ減少を無効化する

・偵察

指定した敵チームの能力を調べる

・脱力

指定した敵チーム全員の気力を10下げる

・かく乱

1ターンの間、全ての敵の命中率を半分にする

・愛

加速・必中・ひらめき・熱血・気合・努力・幸運が同時にかかる

・勇気

加速・必中・不屈・熱血・気合・直撃が同時にかかる

・幸運

次の戦闘で得られる資金が2倍になる

・祝福

指定した味方チームの次の戦闘で得られる資金を2倍にする

・努力

次の戦闘で得られる経験値が2倍になる

・応援

指定した味方チームの次の戦闘で得られる経験値を2倍にする

<強化アイテム>

<キャラ強化系>

・真紅のマント

最大HP + 1000 装甲 + 200

・剛壁球

最大HP + 1500 装甲 + 250

・籐の鎧

最大HP + 500 装甲 + 100

・17人のダンスの練習表

装甲 + 200 運動性 + 30、全ての武器の命中率 + 35%

< 技強化系 >

・ 武器チップ

技の武器の命中率が + 1 0 %

・ 体術珠

移動力 + 1、運動性 + 5

・ ミラクルライト

装甲 + 2 0 0、運動性 + 2 5、全ての武器の命中率 + 3 0 %

・ 旅のお守り

最大 E N + 5 0

・ 神々のお守り

最大 E N + 1 0 0

・ 大神玉

最大 E N + 1 0 0。ターン開始時に E N が最大値の 1 0 % 回復する

< 消費系 >

・ 栗の種

H P を全回復。使い捨て。同チームのキャラに使用可能

・ カオルちゃんのドーナッツ

E P を全回復。使い捨て。同チームのキャラに使用可能

・E缶

チーム全てのHPを全回復。使い捨て

・生命の粉塵

味方全てのHPを30%回復。使い捨て

・トリート

味方全てのEPを30%回復。使い捨て

・エリクシール

HP、EP全回復。同チームのキャラに使用可能

・パナシアボトル

全ての状態異常を回復する。

<特殊系>

・トリニティのCD

SPが毎ターン10ポイント回復する

・軍師の羽扇

マップ兵器及び射程1以外の武器の射程が+1

・思い出の雪だるま

ターン開始時にENが最大値の10%回復する

・フェアリーパークの招待券
戦闘時、小隊員でも経験値、PPが小隊長の場合と同じく100%
入手出来る。

・ 摘木酒店のタオル
出撃時に気力+5

・ HANASAKIフラワーSHOPの花束
出撃時に気力+10

個人的妄想設定・ゲームになったら編（後書き）

こんなもの書いていますが、一応本編も書きためて予約投稿します。

気長に待っていただけた幸いです。

戦闘システムは『第三次スーパーロボット大戦α』終焉の銀河へ』がイメージです。

前置き兼スパロボ風CMチックな何か（前置き）

今回はスパロボ風のCMチックな前置きを書いてみました！
ようやく時間が出来たので、執筆中の小説共々同時進行していき
たいと思います。

前置き兼スパロボ風CMチックな何か

世界は無数にある。

無数の世界は、お互いに干渉せず、交わらず。確固たる形を保ち存在していた。

しかし、一部の文明の発達した世界は、その別々の世界を渡り歩く技術を持っていた。

その技術を悪用しまいとする者が、異世界への干渉を防いでいた。が、どんなに抑止力をかけようと、力を悪用しようとする者は居る。

これから語られる『大戦』は、異世界をも巻き込んだ大いなる戦いに身を投じた『英雄達』の聖戦である！
ヒーロー・ヒロイン マイソロジー

参戦英雄

『夜天の書が語る悲しき物語』

魔法少女リリカルなのはAS

『イレギュラーハンター』

ロックマンX3

『機械と少年の友情』

SDガンダムフォース

『俺たちは！2人で1人の探偵さ！』

仮面ライダーW

『戦うことが罪なら、俺が背負ってやる!!』
仮面ライダー555

『愛有る証』

フレッシュプリキュア

『因縁を抱え彼は戦う』

ナムコクロスカブコン

『英雄と呼ばれる者達の物語』

テイルズオブディステイニー

『魔物を狩る狩り人』

モンスターハンターポータブル2G

『三国の漢達』

SDガンダム三国伝（プラモ説明書付録漫画版）

『通りすがりの仮面ライダーだ!!』

仮面ライダーディケイド

オリジナルキャラ

計12タイトル

大いなる悪意が彼らを戦地へ誘う・・・

第零話 「今日の終わり・次の始まり」

その二隻の船は、次元を飛ぶことのできる船だった。

しかし、その船は『彼』によって、鉄くずにその姿を変えていた。

『キャ・・・プテ・・・ン艦・・・長』

一隻の船の人工知能が、自身の艦長の名を呼ぶ。

しかし、その艦長は『彼』によって無残な姿に代わっていた。

そして、『彼』はキャプテンガンダムの胸部装甲を無理やり剥ぎ取り、中に有るクリスタル状の器官『ソウルドライブ』を強引に抜き取る。

「『ソウルドライブ』……………確かに頂いたぞ。キャプテンガンダム。」

『彼の回りには、『三侯の魂が宿る天の鎧』『意志のある魔剣達』『魔法少女達の杖』『飛竜より削りだされた武器』『地球の記憶が宿ったメモリー』『無限の情報を司る命』

それらに、『彼』は魔法陣を展開させる。

「理解。・・・分解。そして……………再構築。……………出来た。装着」

そして、分解された武器・神具は『彼』の鎧となった。

天を仰ぐ『彼』

メインカメラや装甲の隙間からは、抑えきれない光の粒子があふれ出す。

まるで泣いているようにも見える光景だった……

「……出来た。全てを終わらせる俺の鎧。」

爆煙を背に、そうつぶやく。

そんな彼を見る、戦う力の無い者達。

「なんでだよ！！何でこんな事をするんだよ！！キャプテンのソウルドライブを返せよ！！」

「なんでや！？……」はん！？なんで、こないな事を！？」

キャプテンの友達が。異世界の住人が『彼』問う。

しかし、『彼』は、掌を向け静かに言う

「……せめて、苦しまずに逝かせてやる。……俺を恨み続けてくれ。スターライトブレイカー。」

彼の腕を中心に魔法陣が展開し、そしてその魔力を彼らに向けて放つ。

主を失った騎士達。

「なぜだ！！主達は、貴様を好いていた！！なのになぜこんな事をする！！」

騎士達の長が剣を構え、『彼』に対して言う。

しかし、彼は『意志のある紅蓮の魔剣』と『竜帝の意思が宿る剣』を出し構える。

「・・・貴様たちと同じく、俺にも友や仲間を裏切っても。手にかけてでもなさねばならない事が有る。さらばだ、魔導書の騎士達よ。」

そして、この世界には『彼』しか居なくなった。

「・・・さあ、行こう。俺の物語にピリオドを打つ為に・・・」

展開する魔法陣。それは、次元移動の術式である。そう、『世界を移動する術式』。

ここから、始まる。

この物語が、『もう一度繰り返される悪夢』か。『未来へ続く朝焼け』か。
それは彼にしか分からない。

始まりを告げる鐘（前書き）

今回から本編をスタートします。

今回はなのは軸が強い感じに、エックス、555が少し顔だしです。

始まりを告げる鐘

異世界。

誰もが一度は考えた事が有るだろう。

ここでは無い別の世界が有るのでは？

その考えは間違いでは無い。いや、それは正しい事だった。

確かに異世界は存在した。しかし、その異世界を確認する術が無かった。

ゆえに、人々はそれを絵空事や夢物語と笑った。

しかし、彼女は違った。

つい先日までは、ごく普通の小学生だった彼女『高町なのは』は、異世界の住人と出会うことにより、夢物語な異世界の存在を知った。そして、特別な力を身につけた。

人気のない公園。そして、あえて人目につかない場所に彼は居た。近くのベンチには、彼女の鞆。そして鞆の上にはハンカチが。ハンカチの上には小さな石の着いたペンダントが置かれたいた。

「それじゃ、レイジングハート。カウントお願いね。」

『It has understood (分かりました)』

そして、彼女は手にした空き缶を空へ投げ、目を閉じる。

意識を集中させると、彼女の眼前にピンク色の小さな光の玉が出現する。

そして、なのはが意識すると光の玉は空の空き缶目掛け飛んで行き、空き缶を空中で弾いていく。

その回数をレイジングハートと呼ばれるペンダントが数える

『97・・・98・・・』

そして最後の100目に光の玉はなのはの目の前に戻り、空き缶が下りてくるのを静かに待つ。

空き缶が射線上に乗った瞬間光の玉は、空き缶に向かい、今まで以上の速さで空き缶を弾く。

弾かれた空き缶は、弧を描きゴミ箱に向かって飛んでいくが・・・ギリギリのところで外れてしまった。

「へへへ・・・失敗しちゃった。」

ゴミ箱に入りそびれた空き缶を手動で入れ直すのは、なんなのはを励ますレイジングハート

『There is no such a thing. It was quite good feeling. (そんなことはありません。中々良い感じでした。)』

「ありがとうレイジングハート。」

そう言い、なのははレイジングハートを首にかけ、鞆を背負い学校へ向かい歩き始めた。

しかし、彼女はまだ知らなかった。

自分が一年前の事件以上の出来事に遭遇する事を・・・

同じ公園の展望台近くのベンチ。

その近くに2台のバイクが止まっていた。

一台は真紅のオフロードタイプ。

もう一台は、どこのメーカーの物かわからないシルバーのバイク。

ベンチに腰掛けるのは若い1組男女。

お互い膝に寝袋を抱えている。この姿から分かるように、彼らはここで夜を明かした。はたから見れば2人で旅行している風にも見えなくはないが・・・

「・・・おい。お前何時まで着いてくる気だ？」

青年が対面に座る女性に聞いた。

女性はマグカップに注がれた珈琲を一口飲み答える。

「あんたはこの、ベルトで変身出来た。だから貴方は私を守る義務がある。」

そう言い、再び珈琲を一口

青年は小さく舌打ちし、手にしたマグカップの珈琲を必死に冷やした。

そんな青年の姿を見て、女性は一笑する。

「なに、あんた。もしかして猫舌なの？」

そう言われ、青年は女性を睨む。無論凶星だ。

青年の名は乾巧

女性の名を園田真理

彼らは昨日初めて出会い、そして謎の怪物に襲われた。

そして、真理が持っていたトラッシュケースの中のベルトで巧は変身し、その怪物を倒した。

しかしこれが、彼の長く険しい戦いの入口にすぎなかった・・・

異世界と繋ぐ道。

その船は今そこを飛んでいた。

船、と言うと御幣があるかも知れない。

どちらかと言うと戦艦と言った方が近い。

戦艦の名をアースラ

艦首にはこの船を指揮する女性・リンディ・ハラオウン

「はあゝ。ようやく一息つけるわね。」

そう言い、肩を動かし椅子に身を任せる。

「艦長。どうぞ。」

後ろより、お茶を持ってくる女性・エイミィ・リミエッタ。

緑茶と一緒にコーヒーマイルクとブラウンシュガー。そして羊羹を並べる。

「ありがとう。子供達は？」

リンディはその緑茶にブラウンシュガーを一個、ミルクを一個入れながらエイミィに問う。

その問いにエイミィは笑顔で答える。

「今クロノ君とトレーニング中です。」

「随分と余裕ね。」

「勝訴確定の裁判ですしね。」

そう言いエイミィはリンディから差し出された羊羹を一つ食べる。

アースラの食堂はかなり広い。

無論アースラ事態も広いのだから当然だった。

そんな食堂の一角に座る4人組

金髪の少年、同じく金髪のツインテールの少女、赤い長い髪の女性。しかし、この女性には狼のような耳が生えていた。

そんな3人の前に座る黒い髪の少年。

「良いかい？勝利確定の裁判でも一応受け答えはハッキリ頼む。」

そう金髪の少女に言う少年。

彼の名をクロノ・ハラオウン

クロノの問いに答える金髪の少女・フェイト・テストロッサ。

彼女はとある事情により、この戦艦アースラの属する『時空監査局』の裁判にかけられる事になった。

しかし、彼女が悪い訳ではない。彼女を生み出した者がフェイトを使つて悪事をした。

それだけのことだった。

「で、そのフェレットモドキも一応、聞かれた事には正直に答え
てくれ。」

クロノがフェイトの横に座る金髪の少年に言う

「うん。分かつてる。……って誰がフェレットモドキだ！！僕に
はユーノ・スクライアと言う立派な名前が有るんだ！！」

椅子から立ち上がり、怒鳴るユーノ。

そんなユーノを宥める、赤い髪の女性。

「ま、まあまあ。ユーノ落ち着いて。」

苦笑いの女性。彼女はフェイトの使い魔のアルフ。

フェイトとは姉妹のように中が良い。

そして、彼女を支えた大切な存在でもあった。

「場を和ませるちよつとしたジョークだ。」

淡々と答えるクロノ。

しかし、ユーノ本人は大分ご立腹だった。

異世界ミッドチルダ。

この世界がフェイト達が目指していた世界である。
そして、とても高度な科学が発達し、魔法が発達した世界でもあった。

戦艦アースラが格納庫に収容され、フェイト達が船から降りると、
一部の発着口に人盛りが出来ていた。

しかし、それは芸能人を見に来て出来るような華やかな人盛りでは無かった。

そして、その人盛りの大半はロボットとだった。

確かに外観はロボットそのものだが、顔は色や質感は人間と遜色なかった。

彼らの事を人は『レプリロイド』と呼び、人間と共存していた。

そして、彼らにも人と変わらない心を持っている。

ゆえに犯罪を犯す者も居る。

そう言ったレプリロイドを取りします者を『イレギュラーハンター』
と言っ

この人盛りもイレギュラーハンター達による者だった。

「エックス隊長。異次元へ違法介入したイレギュラーの受け渡し終了しました。」

一体のレプリロイドが、エックスと呼ばれる蒼い装甲のレプリロイドに敬礼を報告を行う。

「分かった。そのまま連行してくれ。」

「了解。」

そんな光景を遠目に見るフェイト達。

「あれがイレギュラーハンターかい。初めて見た。」

背伸びをし、物珍しそうに見るアルフ。

そんなエックスに近づくリンディ。

「エックス隊長。お久しぶりね。」

「これは、リンディ提督。お久しぶりです。」

「隊長への就任式以来かしら？」

「はい。もしかして、奥のあの子が、アリシア・テスロッサの・・・」

「ええ。でも、とてもいい子よ?」

フェイト達の方を向き、笑顔で答えるリンディ。

「それは良かった。裁判は勝訴確定と聞いています。」

「エックス隊長。御話し中しません。」

話の途中で部下からの呼び出しを受けるエックス。
そして、一礼しリンディと別れる。

「なあ、クロノ。あの蒼いレプリロイドって、まさか・・・」

「ああ。第17番精鋭部隊の現隊長エックスさ。」

それを聞くと、フェイト達の顔に驚きの色が浮かぶ。

イレギュラーハンター第17番精鋭部隊

名の通りイレギュラーハンターの中でも精鋭を集めた部隊であり、
その隊長を務める者はまさに精鋭中の

精鋭と言えた。

様々な英雄達が未だこれから起きる事を想像できずにいた。
これから起こる大きな戦いの事を・・・

神の瞳・轟竜の咆哮（前書き）

今回はTODチーム（一部）MHP2Gチームです

にしても、プロローグ長いな・・・

神の瞳・轟竜の咆哮

とある異世界。

その世界には、不思議な生き物が、ミットチルダとは違う魔法が確立されていた。

『レンズ』

それがこの世界において、もつとも普及した資源であり、人々の生活を潤していた。

純度にもよるが、眼鏡のレンズ程の大きさのものでも、高値で売買されていた。

しかし、このレンズはただ高価なだけではない。

ある特別な加工を施す事で、エネルギーを生み出したり、生活に必要な物を作り出す事が出来る。

それゆえに、このレンズが大きければ大きいほど生み出されるエネルギーや価値は必然的に大きくなる。

しかし、それゆえにレンズを悪用しようとする輩が生まれてくる・

青い空の下を歩く旅人。

金髪ของボサボサの髪の剣士。その頭はどことなくハリネズミを思い

出させる。

その前を歩く黒髪の少年。少し目つきが悪く取っつきにくそうな雰囲気を出しているが、どこか物寂しそうな雰囲気も纏っている。

「なあ、リオン。まだハイデルベルグには着かないのか？」

金髪の青年・スタン・エルロンが、目の前を歩くりオンと呼ばれる少年に問う

「もう直ぐだ。気温が大分下がって来た。もうハイデルベルグの領土に入っているはずだ。」

そうスタンに言うリオン。

が、スタンの後ろを歩く黒髪の女性が文句を言い始める。

「ちょっとリオン！いい加減休まない？流石に歩き続けてたら効率が悪わよ？」

そうリオンに黒髪の女性・ルーティ・カトレット。

この世界では珍しくないレンズハンターと言うのも生業にしている。

が、リオンはその提案を却下した。

「ふざけるな。これ以上グレバムを逃がし、最悪神の瞳を悪用される結果になったらどうする。今はまだ、悪用される前に留まっているが……」

咄嗟。リオンはルーティに対して話を止め、身構える。

「お前達。気づいているな？」

腰の曲刀・シャルティエに手を伸ばし、反対の手に短刀を握るリオ
ン。

「はい。飛竜・・それもかなり大型。それが近くに居ます。」

緑色の長い髪を二つの三つ編みにした眼鏡の女性・フィリア・フィ
リスも背中に背負った大剣 クレメンテを両手で構える。
そして、その横に立つ褐色の肌の女性・マリー・エージェントも戦
斧を構える

「ああ。まだ姿を見ていないのに、ここまで威圧感を感じる。・・・
まるで、目の前に居るみたいだ。」

固唾を飲み語るマリー。

スタンを、腰から剣・ディムロスを抜き構える。

「もしかして・・リオレウスだったりして。それも大分大きい奴。」

「冗談はやめろ。本当だったらどうする。火竜リオレウスを討伐す
るのには、それなりの準備が居るには知っているだろ。今の装備で
火竜と遭遇なんて僕はごめんだ。」

が、スタンの予想を超えた相手と彼らは戦う事になった・・

刹那。

草原に響く飛竜のけたたましい咆哮。

「上だ!!」

リオンがいち早く気づき、全員はその場から飛びはねるように散った。

後少し、回避が遅れていれば、その場に残っていた者は、目の前の飛竜の下敷きになっていただろう・・・。

「おいおい・・・。冗談だろ。まさかりオレウス以上の奴が来るかよ・・・。」

立ちあがり、ディムロスを構え直すスタン。
彼の目の前にいる飛竜。

茶褐色の鱗の皮膚にトラのような黒い模様が走る。

強固な頭蓋に鋭利なキバ。

碗部より生える羽。

降り立ったのは飛竜主の中でも危険度の高い竜。

轟竜ティガレックス

魔物狩りを習わしにしている者でもそれ相応の装備が無いと、戦うのをためらうほどの相手である。

「ちょっとスタン！！なにこんな化け物呼んでんのよ！！リオレウス以上の来ちゃったじゃん！！」

そう怒鳴るルーティ。

「話す暇が有るなら構えろ！！来るぞ！！」

そして、もう一度ティガレックスは咆哮し、スタン達に襲いかかっ

た・・・

そんなティガレックスの姿を双眼鏡で確認する者達がいた。
少し高い崖の上。

魔物を狩る事を習わしとしている者『ハンター狩り人』である。

全員が身なりのしっかりした鎧を着込み、個人個人で獲物が違った。

有るものは、身の上の大剣

有るものは、ガンランス機械槍

有るものは、ヘビィボウガン大型のボウガン

有るものは、ハンマー大槌

「ねえ。なんかティガさん、別の人襲ってるよ？どうする？」

ボウガンを持つハンターが双眼鏡越しに残りのメンバーに言う。

「しかも、一人はダリルシェイドの剣士リオン・マグナスじゃん。
うわ・・・ヤバいのに食いついちゃったな・・・。」

顔を悪くし、双眼鏡をしまうボウガンのハンター。

大剣のハンターは組んでいた腕を解き、装備品を確認し、一歩前に出る。

「俺たちの不祥事で巻き込んだんだ。・・・行くぞ。」

そして、崖を滑り下りて行く。

「はいよつと。」

それに続いて、ガンランス機械槍のハンターも続いて下りて行く。

この出会いが、彼らを異界の戦いに巻き込んでいくのだった・・・

神の瞳・轟竜の咆哮（後書き）

MHP2Gからモンハンに入ったんですが、初見ではレウスよりティガに絶望しました……。

一人ティガで泣いて、異常強震（ティガ2頭）で膝を着きました……。

やっぱりモンハンはみんなでやった方がいい！！

ちなみにキシは太刀と大剣と笛と弓がメイン装備です。

第一話 「黒い切り札・緑の疾風／鉄鎚の騎士の襲撃（前書き）」

ここから本編スタートです

第一話 「黒い切り札・緑の疾風／鉄鎚の騎士の襲撃」

文化と呼ばれる物はない世界。

草原とは呼べない。まさに荒野と呼ぶにふさわしい。

一振りの太刀とそれを収める鞘。

長い桃色の髪は後ろで纏めている。

小脇に抱える一冊の茶色い本。

表紙には金色の十字架のような装飾がされている。

そんな彼女の眼前には、倒れる何体ものこの世界の生き物。

傷口は多く、出血もしているが、決して命にかかわるような怪我ではなかった。

まさに不殺。

それが出来るだけ彼女・シグナムの実力が高い事の証明だった。

「……流石に、この程度の相手ではそんなにページは埋まらないか」

本のページを捲り、そうつぶやく。

そんな彼女の後方から響く拍手

慌ててシグナムは拍手の方へ向き、愛刀・レヴァティンを構える。

「いやー、素晴らしい。流石はヴォルケンリッターの長。不殺を貫き、なお且つリンカーコアを抜きとるとは、私感服いたしました。」

「貴様！何者だ！！いや、それよりなぜ私の素性を知っている！！」

未だ拍手を止めに男。

男は白いスーツを纏い、首には赤いスカーフを巻いている。

この男がこの世界の文明の人間では無いのは直ぐにわかる事だった。

「おー怖い。とりあえず私の話を聞いてくださいよ。」

シグナムの殺気を悟り、ようやく拍手を止め、その手を自分の肩ほどまで上げる。

が、その瞬間男の顔つきが変わった。

そして、風より早くシグナムが危険を察し、男が居た位置に飛びかかり、レヴァティンを振り下ろしていた。

しかし、男は居なかった。

「流石、ヴォルケンリッターの長。容赦ないですね。ですが、いささか短気すぎませんか？人の話は最後まで・・・」

「レヴァティン！！カートリッジリロード！！」

『cartridge・reload！！』

シグナムの指示に従い、レヴァティンは魔力の込められた薬莢を数発廃棄し、刀身が赤く燃え上がる。

そして、後ろに回った男に切りかかる。

渾身の一撃。

普通の人間には過ぎる一撃。

普通の人間ならばの話だが・・・

確かな手ごたえは有ったが、現実には違った……

「な！？馬鹿な！！」

魔力で燃え上がった刀身を男は顔色一つ変えず、右手の2本の指で押さえていた。

「話を聞けと言っているのですが？」

刀身を抑える指を全ての指に変え、刀身を掴んだ手に力を込める。そして、レヴァティンの刀身に罅が走る。

シグナムは慌てて、レヴァティンを引き戻し、男と距離を取る。

「……………良いだろう。話を聞こう。」

背中に嫌な汗をかきながら、ようやく男と話をするシグナム。

「よろしい……………話とは他でもない、その夜天の書。ひいては貴方が使えている主・八神はやてに関わる事です。」

八神はやて。

その名を聞き、再度身構えるシグナム。

「シグナム！退け！」

その少女の声と共に男の頭上に影が出来、巨大なハンマーが男を潰したように見えた。
そう、見えただけだ。

「大丈夫か？シグナム？」

ハンマーを持つ少女・ヴィータがシグナムの安否を確認するが、

「いやはい。ベルカの女性とはこうも血の気が多いのですか？たまには武器では無く花を。甲冑では無くドレスを纏っては？」

今度は宙に浮き、話す男。

「おい、シグナム。なんだこいつ。」

ヴィータがハンマー・グラーファイゼンを構える。
が直ぐに、ヴィータも男の放つオーラを察する。

「……………私はあまり気が長い方では無いのですが。そして……………。何度も同じ事を言うのは……………嫌いなのですがねえ。」

自分の下に居る2人を、睨むように見下す。

「ヴィータ、攻撃するな。あの男と少し話をする。」

ヴィータを制止し、宙に浮く男を見上げる。

「よろしい……………では、」

そして男の話を聞き始める。

「・・・・・・・・・・と、言うお話なのですが？いかがですか？」

「ふざけんじゃねえ！何が提案だ！完全に脅迫じゃねえか！！」

男に食ってかかるヴィータ。

「ええ。ゆえに貴方達に拒否権も決定権は存在しませんよ？・・・・・・拒否すれば、貴方達の大切な八神はやてがどうなっても知りま

せんよ？」

そう言うと、男の口が三日月ように吊り上り笑う。

苦虫を嚙んだような顔をする2人。

「くっ！！・・・分かった。貴様の言つとおりにする。だから、我らが主には・・・」

「ええ。手は出しませんよ。貴方達がこちらの言つ事を聞いていてくれれば、ね。では、しばらくは此方の言つとおりにしててください。それ以外はページの採取をしてもかまいません。では、私はこれで・・・」

それだけ言い、男は指を鳴らし霞のように消える。まるでそこには何も無かったかのように・・・。

「くそ！あの伊達男！！何なんだよ！！」

空に向かった吼えるヴィータ。

「堪えろ、ヴィータ。・・・今は、耐えてくれ。」

目を閉じ、唇をかむしか出来無かった。

巨大な風車の回る都市・風都。
そこが彼女達の住む町でもあった。

小学校の教室。

この学校は制服制の学校のため、全員同じ服装である。

「アリサちゃん、すずかちゃん。おはよう。」

友人と朝の挨拶を交わすなのは。
金髪の長髪の女の子がアリサ。
淡い紫色の髪の子がすずか。
共になのはにとって大切な友達である。

「そうだ、なのは。知ってる？『仮面ライダー』の噂。」

「仮面ライダー？」

アリサの話に疑問符をつけて聞き返す。

「そ。今男子の間で有名なのよ。突然現れて、怪物をやっつけてくれるって言う、神出鬼没のヒーローの噂。」

アリスの話の後、クラスの男子の話に聞き耳を立てると、もっぱらそのヒーローの噂ばかりだった。

「でも、ほんと最近物騒だよね。一年前から変な事件も増えたよね。最近でも行方不明の人も増えてきたし。」

少し不安そうな表情で話すすずか。

確かにここ最近の風都では、怪事件や行方不明者のニュースが多くなっている。

例えるならば、一年前では、突然植物が異常繁殖したり、突然海に竜巻が起きたりなど。がこれらの事件は全てなのは絡みでなのはが解決したのだが・・・。

逆にここ最近の怪事件は、建物が高熱で溶かされたり、到底人では破壊出来ないような破壊工作の数々である。

が、なにもこんな不幸な事件ばかりではない。2年前に事故に会い意識不明だった青年の意識が回復したという話もある。しかし、その後の青年の行方が分からなくなっているのが問題になっている。

「それはそうと。なのは、近々フェイトちゃんが来るんでしょ？楽しみね。」

暗い話題から切り返し、なのはが今一番胸を躍らせている話題にアリスが切り返す。

それは、ミットチルダに行ったフェイトが近々この世界に遊びに来るという事だ。

なのはは、それが楽しみで仕方が無かった。

「ほんと楽しそうだね。今のなのはちゃん。私たちがこんなに楽しみなんだし、なのはちゃんはもっと楽しみなんだね。」

自然と笑顔になるなのはの顔を見てすずかも自然と笑顔になる。しかし、それは仕方がない事だった。

一年前の事件

それがなのはとフェイトの出会いだった。

そして、その事件の時も様々な人が手を貸してくれた。
時を走る電車に乗る仮面ライダー。

黄金の狼。

闇夜に駆ける鴉。

超古代の戦士。

5人の伝説の女の子と可愛い妖精

今彼らが何をしているのか、どこで何をしているのかは、なのは知らない。

それらの人々の手を借りて、なのはとフェイトは友達になった。

それだけの事件を経た友情はとても強い絆で出来ている。

それだけに離れ離れになる時はとても悲しかったが、また出会う事を約束し、笑顔で別れた。

そのフェイトがここ数日のうちにこの世界に遊びに来る事が分かった。

「うん！早く会いたいなあ。」

心躍るなのはだが、それに水を指すように授業開始のチャイムが鳴る。

ハードボイルド。

彼はその言葉を彼は体現したと思いこんでいた。

タイプライターを内ながら、珈琲を一口。

「日の差す穏やかな午後。そして俺そこに居る俺。なんてハードボイルドなんだ・・・」

窓から差す日差しに移る自分に酔う私立探偵。

彼の名は、左翔太郎。

そんな彼の頭を緑色のビニール製のスリッパで頭を一発

「何言ってるの。このハードボイルド。」

「っ！！こおら、亜樹子！！何すんだ！」

スリッパを持つのはここ『鳴海探偵事務所』の所長 鳴海亜樹子。
前所長の鳴海莊吉の娘である。

「それより、フィリップ君が呼んでるわよ。」

そう言われ、翔太郎は玄関の横に有る帽子がかかっているドアを開ける。

中は探偵事務所とは風景が全く違った。

床は歩けば足音が響く鉄板が一部。他は金網状のになっている。

さらに、その下には一台の大きな乗り物。しかし、中はうす暗く良く見えない。

そんな部屋の中には、フードをかぶり、一冊の本を読んでいる青年・フィリップが居た。

「どうしたフィリップ？」

「翔太郎。一年前、風都がドーパントとは違う怪事件に襲われたのは覚えているね。」

「ああ。急に植物が漫画顔目けに繁殖したりしたな。」

「その時に、変な力が干渉事があつた。それが気になってね。」

「で、それがどうした。」

「ここ最近、その時の変な力をまた確認した。星の本棚でも調べられないんだ。調べたい。」

そう言うと、フィリップはフードを取り、翔太郎に歩み寄り。

「まあ、あんな事になるのはご免だしな。良いぜ。で、どこを調べる。」

「場所は僕が知らせる。ひとまず、市内に出てみてくれ。」

それを聞き、翔太郎は探偵事務所を後にし、緑と黒のバイクに跨り走りだす。

夕闇に沈む風都に向けて……

ビルの中にヴィータは居た。眼前には、ミッドチルダの魔導師が2人。

彼女と戦ったのだろう。大分ボロボロな姿だった。

「殺しはしない……。でも、リンカーコアは頂いていくよ。」

そう言い、ヴィータは本・闇の書を開く。

闇の書が開くと、魔導師達の胸から小さな光りの玉が出る。

その玉は闇の書に吸い込まれてる。そして、闇の書の空白のページ

に字が浮かび上がり、ページを埋めて行く。
その、作業を終えるとヴィータは宙へ舞う。

「・・・あんな相手だとページは進まないな。」

そうつぶやく、ヴィータに近づく男。無論、彼も宙を浮いて。

「そっちはどうだヴィータ。」

「ザフィーラか。とりあえずページは埋まってる。でも、アイツに飼われてるって思うと・・・」

奥歯を噛みしめるヴィータ

それを宥めるザフィーラと呼ばれる男。

「落ち着けヴィータ。今はページを埋める事に専念しろ。何より、例の人物が現れない以上我々には何もできない。」

「ああ。それより、たまに出るあのバカでかい魔力の奴のコアが手に入れば軽く20ページは埋まりそうなんだけどな・・・」

「なら、二手に分かれて探すぞ。魔導書と結界は任せた。」

「ああ。・・・グラーフアイゼン、結界形成！」

ヴィータは手にしたハンマー・グラーフアイゼンを振る。すると彼女の足元に三角の魔法陣が現れ、彼女達以外の町の人が消える。いや、彼女が特定の人物を結界の中に閉じ込めたのだ。

自室にて寛ぐのは。

刹那、テーブルの上のレイジングハートが告げる

『Mastering and the enemy come .
』

「え?!」

ビルの上で、レイジングハートが敵と認識した相手を待つ。

「レイジングハート、今どの辺？」

『The meter 10080 distances meters and the attacks come.』

レイジングハートが攻撃の出現を警告する。

攻撃用の魔法弾がなのはの後方より襲いかかるが、なのはも防御陣でそれを受け止める。

が、今度は隙の出来た前方より、ヴィータがグラーフアイゼンを振り上げ襲いかかる。

しかし、それも防御陣で受け止める。

「っ！」

思わず、悲痛な声を出す。支えるコンクリートの地面がなのはの足の形に凹んでいく。

「グラーフアイゼン！！ブチ抜けえええ！！！」

力を込め、なのはの防御陣ごとなのはを吹き飛ばす。

ビルより飛ばされ、降下していくなのは。

「お願いレイジングハート！……セッアップ！！！」

なのはの指示に従い、レイジングハートはなのはのバリアージャケットを展開させ、自身も小さなペンダントから、杖の姿に変わる。そして、足に光の羽を出し、宙に浮く。

「急に、襲われる理由は無いんだけどな。」

そう、ヴィータに告げるなのは。

だが、ヴィータは何も告げず、腰から銀色の玉を4つ取り出し、宙に投げる。

そして、漂う玉をグラーファイゼンで力強く打ち出す。

打ち出された玉は不規則な動きでなのはを襲う。が、なのはもそれを回避する。

「何か言ってくれなきゃ、分かんないじゃん!!」

攻撃の隙をつき、攻撃用の魔法陣を前方に展開し、その中心にレイジングハートを構える。

そして、放たれる高威力の魔法の光線。

「な!?!」

予想以上の威力にヴィータの回避も遅れる。

ダメージは無いが、被った帽子が半壊し、遠くに飛ばされる。その事に激情するヴィータ

「あ、あれ?怒っちゃった?」

悪い事をした?と思うのは。

まるでその事へ対しての復讐と言わんばかりに、ヴィータは

「グラーファイゼン!カートリッジリロード!」

『cartridge・reload!!』

シグナムのレヴァティンのように魔力の込められた薬莢を廃止する。

そして、グラーファイゼンに火が灯り、それを利用しヴィータはその場で回転を始める。

グラーファイゼンの威力は数秒で、倍以上の威力になり、その威力を利用しヴィータはなのはの突撃する。

速い。それよりも威力が高い。

なのはの回避は不可能だった。

ゆえに最大限の防御陣を出すが・・・。

「ブチ抜けえええ!!」

多少の抗いにはなった。が、防御陣は碎かれる。

吹き飛ばされ、地面に叩きつけられるなのは。

コンクリの道路に小さなクレーターが出来る。

幸い、防御陣と飛行していた事で、出血などは無いが、立つのがやつの状態である。

地面に着地し、立ち上がるのがやつのなのはに歩み寄る。

そして、グラーファイゼンを振り上げるが・・・

ヴィータの後方から迫るバイクのライト。

バイクの方へ振り向き、宙へ回避するヴィータ

バイクは、なのはの前にドリフトし停止する。

「・・・明らかに向こうが悪党だよな。なあフィリップ。」

バイクから下りヘルメットを取り、帽子をかぶり直す。

「お前。左翔太郎か？」

ヴィータが翔太郎の名を呼び、彼を確認する

「へえ。俺を知ってるのか。んじゃ、いろいろ聞こうか。今の町の事とか。この子を襲ってる理由とかな。」

「うるせええ！」

翔太郎の問いに答えず、グラーフアイゼンを構え襲いかかるヴィータ。

「しょうがない。行くぞフィリップ！」

そう言い、翔太郎は懷から赤いベルトのバックルを取り出す。しかし、普通のバックルでは無い。メカニカルで、二つの無いかを入れる挿入口が点いている。右側の挿入口には銀色のマーク、左には金色のマークが。

それを腰当てる。すると、バックル・ダブルドライバーはひとりで翔太郎の腰に巻かれる。

さらに、翔太郎は上着の左側の内ポケットから、黒いUSBメモリ・ジョーカーメモリを取り出し、端子近くに有るボタンを押す。

『joker』

USBメモリより、その音声が鳴り響く。

それと比例し、翔太郎のダブルドライバーの右側の挿入口に緑のUSBメモリ・サイクロンメモリが現れ、それを左手で押し込む。そして、右手のジョーカーメモリを左の挿入口に入れ、ダブルドライバーの挿入口を左右に開く。

「変身！」

『cyclone・joker』

そのメモリーの声の後に、翔太郎に装着される外装。

右側が緑色、左側が黒。真ん中に左右を分けるように銀色のラインが走る。

変身と同時に、ヴィータのグラフィアizenが襲いかかる。
が・・・

それを、右手で受け止める翔太郎。
いや・・・

仮面ライダーW

彼こそが巷で噂の仮面ライダーの正体である。

「どうした、ハンマーガール？それが全力か？」

「なに！？」

全力では無かったとはいえ、まさか受け止められるとはヴィータ自身思いもよらなかった。

慌てて距離を取るヴィータ。

そんなヴィータに向け指を指すW

『さあ！お前の罪を数えろ！！』

風都に吹く、黒い疾風。

動き出した運命。出会ってしまった事で、動き出す齒車。

第一話・2 「黒い切り札・緑の疾風／鉄鎚の騎士の襲撃」(前書き)

作品のイメージ曲を探してたら、JAMプロジェクトの『Gong』
にしようか悩みましたが、『コネクト』で行こうかと考えてる今日
この頃

第一話・2 「黒い切り札・緑の疾風／鉄鎚の騎士の襲撃」

ヴィータにとって彼は戦い難い相手だった。

Wが空を飛べない事は直ぐに分かった。ゆえに過ぐに距離を取り自分しか攻撃できない空中からアウトレンジでの攻撃に切り替えた。が、それが甘い考えだった。

『距離を取つての攻撃だね。こういう場合は・・・』

そう言い、Wから聞こえるフィリップの声。そいて取り出す黄色のメモリ・ルナメモリ。

『Luna』

そして、サイクロンメモリと取り換え、再びダブルドライバーをたおす。

すると、緑色の右半身のみ黄色に色が変わる。

『Luna・joker』

そして、空高くに居るヴィータに向かって右手を振り上げる。その右手はまるで鞭のように撓り、伸びる。

「なんだその手！？クソ！」

攻撃に転じようと構えていたが、直ぐに回避に転じる。しかし、

『予想通り。翔太郎』

フィリップの声の後、今度は左手に銅色のメモリ・メタルメモリとジョーカーメモリを入れ替える

『Luna・metal』

そして背中に現れるメタルシャフトに手を伸ばし今度は、それをヴィータに向けて振る。メタルシャフトをまた、右半身と同様に伸べる。

「しまった!？」

回避しようとした先に、メタルシャフトを延ばされ、体に巻きつかれる。

動けなくなったヴィータを引き寄せるW。

地面にたたきつける訳では無く優しく引き寄せるのは、翔太郎の優しさだった。

「ゲームセットだハンマーガール。さあ、説明してもらっぜ、何で町に誰もいないのか、この子を襲う訳とかな。」

そう言い、後ろに居るのはを指差す。

抜けだそうともがくが、鞭のように伸びたメタルシャフトを抜け出せずにいる。

(クソ。こいつらをぶっ飛ばすのは簡単だけど、魔導師はコアを取らないと意味ないし。仮面ライダーは右半身の方が必要だし・・・どうする?)

自分に課せられた役割がヴィータを存分に戦わせなくしている。それゆえに、どうしても手を抜かなくてはいけない。

『翔太郎！右だ！』

フィリップの声に反応し、メタルシャフトを元の形状に戻し、斬撃を防ぐ。

夜風に靡く桃色の髪。白銀に光る刀身。

「……左翔太郎だな。悪いが、貴様のパートナーを頂くぞ」

剣の主・シグナムがそう冷たく翔太郎に告げる。

「なんだよ、アンタ。フィリップになんか用か……よ！」

メタルシャフトを振りきり、シグナムを払いのける。それを華麗に回避しヴィータの前に着地する。

「大丈夫かヴィータ？」

「うるせーな。今から逆転する事だったんだよ。」

グラーファイゼンを構える、頬を膨らませシグナムを見る。

「そうか、それはすまなかった。……それと落し物だ。」

そう言い、ヴィータの頭に先刻落とした帽子をかぶせる。

「あ、ありがとう。」

ぎこちないお礼を言うヴィータ

「2対2。だが、そっちの魔導師は戦える様子では無い。実質2対1だ。どうする、仮面ライダー？」

シグナムとヴィータがWに対して武器を構え言う。

確かに状況は完全にシグナム達に傾いた。

先刻、までは五分五分。いや、理由はどうあれWの方が押していた。しかし、今度は相手は2人。流石に2人相手にさっきと同じ手が効果的とはいえない。いや、効くとは思えない。

「・・・さあて。どうするかね・・・」

ルナ・メタルの姿で考える翔太郎。

後ろには手負いのなのは。着ているバリアジャケットの上着のほとんどが無い状態。手にしたレイジングハートも自己修復が不可能なほどに大破している。かろうじてA-Iが生きている程度。攻撃もできるかどうかも怪しい。

「なら、これで状況は同じね・・・。」

夜の空に響く少女の声。

そして、シグナムに切りかかる。

しかし、シグナムとヴィータは後方へ回避する

風に揺れる長い金髪と、黒いマント。

手にした金色の刀身の鎌・バルディッシュサイズ。

「フェイトちゃん・・・！」

なのはがフェイトの名を呼ぶ。

「なのは、大丈夫？・・・それと、貴方。なのは守ってくれてありがとう。」

なのはの安否を確認し、Wへのお礼を言う。

「なんだ、お前。」

ヴィータがフェイトに問う

「時空監査局、囑託魔導師・フェイト・テストロッサ。・・・民間人への武力行為は時空監査局が厳しく取り締まっている。ただちに武装解除すれば、貴方達にも弁解の機会が与えられる。」

2人への勧告をするフェイト。

そして、バルディシュを構える。

しかし、武器を収める様子を見せない2人。

「・・・どうしても戦う事をするんですね。」

「貴様達にも引けない理由があるように、我々にも引けない理由がある。・・・行くぞ！」

フェイトとの距離を詰めるシグナム。

そしてレヴァティンとバルディシュが罅迫り合う。つはせごあつ

再度、距離を置き今度は空中でぶつかり合う。

「おいおい。何なんだよこいつら？」

空中に舞うシグナムとフェイトを見上げるW。

そんな、Wに対してグラーフアイゼンで襲いかかるヴィータ。

「貴様の相手は、私だ！・・・おとなしく、右側の方を渡せ！」

ヴィータの攻撃を回避しながら、なのはから離れるW。

それは得策と言えた。戦えないなのはを狙われては危険と判断した翔太郎。

そうなれば、今度はなのはを守りながら戦わなければならない。

空中から攻撃し、空中へ戻る。常に動きまわっている為、先刻同様なルナ能力による捕獲は難しくなった。

「まったく。めんどくせえな。しょうがねえ。」

そして、取り出すトリガーのガイアメモリ。そして、メタルメモリから、トリガーメモリに交換する。

『Luna・trigger』

今度は、左半身が青色に代わり、メタルシャフトの代わりに、メカメカしい銃・トリガーマグナムが左胸に現れる。

それを手に取り、宙に居るヴィータに向けて、引き金を引く。

放たれた無数のエネルギー弾はヴィータに対して飛んでいくが、簡単に回避する。

「どこ狙ってる、下手くそ！」

Wへ対して挑発するが、
避けたはずの弾は急にその弾道を変え、ヴィータに対して襲いかかる。

変幻自在にの攻撃が可能になるのが、この『Luna』のガイアメモリの特性である。

先刻の『joker』のメモリと組み合わせれば、手足を伸ばした戦いが、『metal』と組み合わせればメタルシャフトが鞭のように伸び縮み縮み出来る。

そして、同時にガイアメモリには相性が存在する。この『Luna』メモリと最も相性が良いのは『trigger』のメモリである。
『trigger』のメモリは銃による狙撃射撃と可能とするメモリである。

ゆえにこの組み合わせで生まれる『Luna・trigger』のWの射撃攻撃は、銃口の射線上から良ければ回避できる訳ではない。むしろ、回避したと思ひ油断すれば弾道の変化した弾により追撃される。

また形勢が逆転する、ヴィータ。
やはり相性が悪い。

シグナムのように、高速で間合いを詰められればあの変幻自在の攻撃を掻い潜れる。

が、それは今のWの性能から見たヴィータの見解である。

そう。Wにはまだ力が有る。ヴィータが知らないメモリの力が・・・

自分のために戦う2人を見るなのは。

「なのは大丈夫？」

なのはの肩を支えるユーノ。

「ユー・・・ノ君？どうして？」

漏れる声でユーノの名を呼ぶ。

「ごめんなのは。直ぐに戻ってくるつもりだったけど、ミットチル
ダでも事件が起きて直ぐに来られなかったんだ。それに僕たちのだ
けじゃない。アルフやクロノ。アースラの間みなも来てるよ。」

そう言い、ユーノはなのはを回を始める。

「それよりなのは。どうして襲われてるの？それにあの、黄色と青
の外装の人は？」

「分かんない。ただ私を助けてくれたのは確かだよ。」

空間の中にアースラは待機していた。

解析室に居る、クロノとエイミー。

エイミーはキーボードを素早く叩き、今風都を覆っている結界の解析と分解を行っていた。

辛うじて、フェイト、ユーノ、アルフを結界内に転移は出来たが、今ではもう外から結界内に転移は不可能な状態になってしまった。

「待つてねクロノ君！今結界の解析を終わらせるからね！……」

・各般！解析状況は？」

別のチームに対して状況の確認するエイミー

「見た事の無い術式ですから、時間はかかりますがやってみます！」

「お願い！何時間もフェイトちゃん達は耐えられないからね！」

今ままで以上にキーボードを速く打つエイミー達。

「……こいつら。まさか……」

画面を見るクロノが、戦うシグナム達を見て思わず口にしてしまう。

ほとんど動いていないW。

一方、ヴィータは空中で弾丸を避け続け、さらに防御陣で攻撃を防いでいる。

疲労具合を言えば確実にヴィータの方が多い。

状況に応じて戦い方を変える相手がこんなにやりにくとは、ヴィータ自身思っていなかった。

いや、過去に何度か戦った事はあったが、ここまで戦いづらい相手では無かった。

「そろそろ、決めるか。」

翔太郎がそう思った時だった

左側よりWを襲う男。

回避が遅れたWはそのまま、男の拳をもろに受け、ビルの窓を突き破る。

「っ！！なんだ！？」

『大丈夫かい、翔太郎？』

立ちあがり、軽く頭を振る翔太郎。
ビルの外に出る翔太郎。ビルの外。空を見上げると、ヴィータの横の先刻の男がいた。

褐色の肌。腕には小手。鎧は着けていない。
銀髪が月下に生えるが、その頭部には、狼のような鋭い獣の耳が生えている。

「遅れてすまない、ヴィータ。大丈夫か？」

ヴィータの安否を気遣う男・ザフィーラ。

「助かった。正直アイツとは相性が悪い。頼めるか？」

「分かった。」

そしてWへ急接近するザフィーラ。

Wも、相性を考え、ルナ・トリガーのメモリを『heat』『jo
ker』の2本へ切り替え、接近戦用に変える。
今度は右が真紅、左が黒へ色を変える。

燃えるWの拳をザフィーラの拳がぶつかる。

「なかなか、やるな！！我名はザフィーラ！来い左翔太郎！！」

「お前も俺の事を知ってるのか！何なんだ！！」

そして距離を置くザフィーラ。
が、直ぐに魔法陣を展開する。

「速いその動き！封じさせてもらっ！！『ティーンバインド』」

Wの足元より、Wへ巻きつく光の鎖。

「なんだこれ！！」

「我は盾の騎士。バインドを使うなど呼吸をするほどに簡単な事だ。」

メモリーの交換も困難なほどに巻きつくチェーンバインド。
何より手足の自由も効かない。

「……では、右側の方を頂いていくぞ。」

近づいて来るザフィーラ。

「どりゃあああ！！」

Wとザフィーラの間に割って入るように上から攻撃するアルフ。

「ちっ！！後一步のところだ！！」

「あんた！大丈夫か？」

集中を切られたのか、Wを拘束するバインドも途切れる。
身動きが取れるようになったW。

「助かった。・・・あんたも仲間と考えていいのか？」

「ああ。それより、あっちの小さい方を頼むよ！」

アルフが空に居るヴィータに視線を送り、直ぐにザフィーラと交戦を開始する。

第一話・3 「黒い切り札・緑の疾風／鉄鎚の騎士の襲撃」

空中でぶつかり合う剣と鎌。

彼女らの動きに合わせて動く、摩く金色と朱色の長い髪。

シグナムのレヴァテインとフェイトのバルディッシュの刃が鏝迫り
合い火花を散らす。

そして、2人は距離を取り、空中で静止する。

「・・・良い太刀筋だ。・・・改めて名乗ろう。我名はシグナム
ヴォルケンリッターが将だ。」

シグナムがフェイトの実力を認め、改めて自分の名を告げる。

フェイトも、バルディッシュを構えたまま、自身の名を名乗る

「時空監査局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。」

それだけを名乗り、2人は再び空中でぶつかりあう。

金色の閃光。片や朱色の閃光となりて・・・。

地面すれすれを高速移動し、Wと交戦するヴィータ。
それを巧みに交わしながらの攻防。

こうなると、Wの分が悪くなってきた。

力比べ、いや攻撃力だけなら確実にヴィータの方が上。

技量や戦法ならWが勝っている。

しかし、それも『メモリー交換の時間』が有ればの話である。

こう乱戦になると、戦法を変えるのは難しい。

つまり、ヴィータが優位に立つにはWにメモリーチェンジのタイミングを与えずに攻め込むしかない。

「なるほど。・・・ならこれで、どうだ!」

Wと距離を取り、空中から無数の魔法弾を乱発するヴィータ。
この攻撃に対し、今度はWが防戦に回った。

「ツチ!メモリ交換の隙を与えない作戦かよ。・・・こんな時、照井が居る楽なんだがな。」

『トリアルだね。さて、どうしようね。翔太郎』

「人ごとだな、フィリップ。・・・なら、飛ばすぞ!」

『ああ!』

回避を止めたWにヴィータの攻撃が直撃。

『仕留めた』

そうヴィータは思ったが・・・

彼女が気づかない一瞬。

W目掛けて、一羽の鳥が舞い降りていた。

土煙の中から響くメモリー音を聞き、ヴィータは焦った。

そして、確実にし止めようとグラーファイゼンを構え、止めを刺そうと、土煙目掛け振り下ろす。

『e x t r e m e』

「エクストリームメモリー……！」

そう、ヴィータが呟く

グラーファイゼンを盾で防ぐW。

そして、今のWの姿は今までの姿とは逸脱した姿だった。

右側と左側のカラーリングはサイクロンジョーカーと変わらないが、体の中心には透明なラインが走っている。

そして、頭部の装飾は『X』を模したように見える。

盾・ビッカーシールドでヴィータを突き飛ばし、新たなメモリーを取り出す。

『p r i s m』

そして、ビッカーメモリーをシールドの上部に伸びるスロットに差し込み、そのスロットを引き抜く。

スロットの正体は、シールド内に納められていた武器・プリズムソードである。

『ん？翔太郎、おかしいよ。この子のデータが閲覧できない。いや、データが無いよ。』

「どう言う事だ？まあ、良い。行くぞ！」

時刻は夕食時。

この家でも、今夕食の準備をしていた。

しかし、台所に立つのは、車椅子に乗る少女。鍋に作られたシチュウの量は少女一人で食べられる量では無い。
4〜5人ほどの人数で食べるほどの量だ。

そんな時だった。少女のポケットの中の携帯電話が鳴り響く。

「もしもし？」

『あ、はやてちゃん。シャマルです。すいません、いつものオリブオイルが無くて少し遠出のスーパーまで足を延ばしています。』

「ええよ？無理せんでも？」

『出たついでにみんなを拾って帰りますから。・・・すいません、お料理お手伝い出来なくて・・・』

電話の相手は申し訳なさそうに、少女に話す。
しかし、少女は笑って返す

「平気やって。」

『急いで帰りますから。』

「急がんでええって。気いつけてな。」

そついい、電話を切る。

「そつ、なるべき急いで確実に。」

眩き、シャマルは、皆が戦う街の端の端のビルの上に居た。

「クラールビント。導いて。」

『It understands.』

シャルムの指にはめられている、指輪の装飾のクリスタルが宙に浮き、繋がった紐を円状に形作っていく。

作られた、円の中は反対側の景色以外の風景が映し出されていた。いや、風景とは到底呼べない風景が映し出されていた。

「レヴァティン！切り裂け！！」

鏑迫り合いの最中、カートリッジをロードし、守護陣で防いでいたフェイトごと、地面に叩き伏せる。

空中で戦っていた、フェイトは地面にたたきつけられる。

「フェイト!」

「フェイトちゃん!」

遠くで見たいた、ユーノとなのは。

「ユーノ君。フェイトちゃんのところに行つて・・・」

「・・・分かった。でも、なのはここに居て。」

そう言い、ユーノはなのはに治癒と守護の魔法陣を展開し、フェイトの所に飛び立つ。

瓦礫を押し分け、立ちあがるフェイト。

「大丈夫かい、フェイト?」

「大丈夫。」

だが、フェイトの手に有るは二つに切られていた。

「・・・大丈夫。本体が無事なら・・・」

『recovery』

バルディシュの電子音と共に、その姿は元の形状に戻る。

「ユーノ。どうか結界、割れないかな？」

「アルフと協力すれば何とか・・・あと、こっちに手を貸してくれている人も居るから、いけると思う。」

「私が前に出る。お願い。」

そして、再びフェイトとシグナムの戦いは始まる。

皆が、彼女のために戦っていた。

「・・・助けなきゃ・・・」

『Mastering・If it is us, it is possible to do・』
（マスター。私達なら出来ま

す。）Please call． With the Starlight blursquid（呼んでください。スターライトブレイカーと）」

「ダメだよ！あんな負担の大きい魔法なんて！」

「It is safe． For you（大丈夫です。皆さんのためなら。）」

レイジングハートの決意の固まった声に、なのはは・・・。

「分かったよ、レイジングハート。」

そして、レイジングハートを構えるなのは。

『みんな、今から結界を壊すから。ユーノ君とアルフさんは、タイミング良く転送をお願い。』

念で、仲間にそう告げるなのは。

そして、足元に広がる魔法陣。

大破したレイジングハートより生える光の羽。同時になのはの前に
も巨大な魔法陣が広がる。

莫大な魔力がなのはに集まって行く。

「スターライト・・・！！」

そして、その魔力が放たれる瞬間

「あつ・・・！」

なのはの胸より伸びる女性の手。なのはの胸を貫いている訳ではない。女性の手となのはの胸が接触している部分は、淡い光を放っている。

「あつ！外しちゃった。」

ビルの屋上から、クラールビントが形作る円の中に手を入れているシャマル。

円の中は淡い光が張られており、違う空間を繋いでいた。今は、なのはの体内。魔導師の魔力の源『リンカーコア』を抜きとる為に、その力を使っていた。

再度座標を整え、今度は的確にシャマルはなのはのリンカーコアを抜きとった。

リンカーコアを抜きとられた、なのはの魔力は急激に落ちて行く。このままでは、スターライトブレイカーを打てなくなる。

本能でなのは察した。

「ス、スターライトブレイカーアアアアアア……！」

放たれたスターライトブレイカー！

その魔力は、シグナムらが作った結界を、『力』で打ち砕いた。

『結界が破られた！？みんな、一旦後退を！』

結界が破られた事を即座にシャルは、シグナムらに思念通話を送る。

『分かった。では、一旦別れいつもの場所で落ち合おう』

「くっ！……勝負は預けたぞ、左翔太郎！」

「お、おい。」

捨て台詞を吐き閃光のように消えるヴィータをWは、追う術が無かった。

スターライトブレイカーを放ち終え、なのははその場に倒れ込む。仲間達はなのはに駆け寄る。

庄太郎は変身を解除する。解除すると、翔太郎だけでなく、フィリップも現れる。

インターミッション

今の光景は翔太郎には理解しがたい空間だった。

町を調査していたら、年間もない女の子同士が戦い、宙を舞い、ガイアメモリとは違う力を使った。

「やれやれ……。何が何だか。」

被った帽子を整え、横に立つ相棒・フィリップに目を向ける。

その相棒ことフィリップは、今の状況を楽しんでいた。未知の技術を目の当たりにして「興味深い」と何度も口に出している。

その場に倒れるなのは。それに集まる彼女のために駆けつけた仲間達。

翔太郎とフィリップの近寄り様子を見る。

「おい。大丈夫か？」

「酷く弱ってる。早くアースラに連れて行かないと。」

翔太郎の話を聞いてか効かないでか、ユーノはなのはの現状を調べ適切な処置を始める。

そんな時だ。同じような服、いやローブを言った方が適切である。白地に裾などに青いラインの入ったローブをまとった男達が、空間を割くように現れる。

「医療班！早くアースラへ！いいか、慎重に搬送しろ！」

手慣れた手つきでなのはを応急処置し、出てきた空間を潜り数名がなのはと共に消えて行く。

「クロノ執務官。なのは殿の搬送完了しました。ただちにアースラ内の設備にてメディカルチェックを行います。」

隊長格の男が空中に浮かぶ、クロノに敬礼をする。クロノはそれに頷き「頼む」とだけ言い、庄太郎とフィリップに視線を向ける。それを見た隊長は他の団員と共にこの場を去った。

「みんなひとまず、アースラに戻ってくれ。……出来るなら君達も同行願いたい。」

そう、庄太郎達に告げるクロノ。

帽子を深く被り直し、クロノを見る翔太郎。

「良いが、いろいろ話を聞かせてもらっぜ？」

「構わない。僕達も君たちに聞きたい事がある。」

そして、アースラに招かれた翔太郎達。船内の窓から見える、訳のわからない空間に戸惑っていた。

この船に乗れば直ぐに話を聞かせてくれると思っていたが、どうやら最高責任者共々船員は忙しいらしい。まともに話を聞かせてくれる人員は居ないようだ。

先刻一緒に戦ったフェイト達でさえ、医務室にいるのはに付きつきりである。

客室らしい一室に招かれた庄太郎達だがここでは何をすればいいかわからないため結局は待つしかすることが無かった。

「おい、フィリップ。何か検索できないか？」

「興味深い。これは僕たちの世界の技術では到底作れないものだ。」

翔太郎の声すら聞こえないほどフィリップは興奮していた。

そんな時だった。

船内に響くアナウンス。

「本艦は間もなくミッドチルダに到着します。各員は着艦の準備を。」

アナウンス終了と共に、庄太郎達の部屋のドアが開く。開けたのはクロノである。

「まともに話も出来なくてすまない。急で悪いが、一緒に来てくれ。そこでなら腰を据えて話ができる。」

「ようやくか……。」

そう言いクロノについてく翔太郎たち。

森の中。彼はそこに居た。否、今ここに現れたのだった。

時と空間。時空と言う名の世界を分ける壁を越えて。

全身に纏った機械の鎧の隙間から溢れ出る緑の粒子体のエネルギー。辺りを見渡し、人が居ないのを確認する。

人は無い。しかし、町の明りが見える。ひとまず彼は歩きだした。そして、明りが灯る町を見て確信した。

「着いたな、ミッドチルダに。」

誰に聞こえる訳でもなく鎧の主は言葉を漏らす。

そして、機械の鎧は『彼』から離れ、一代バイクにその姿を変えた。

「行くぞオリハルコン。全てを終わらせる為に。」

『There is no veto power of me .
I have only following to you .
And . . . , (私の拒否権はありません。貴方に従うしか私には在りません。そして・・)』

「なんだ？」

『We do not permit you . (私達は貴方を許さない)』

「それで良い。お前達は俺を憎み続けてくれ。」

そして『彼』はバイクに跨り、町に向かって走る。

森の中。

古い洋館が有った。誰が立てたかは不明であるが、確かにここに有る。

洋館の中には若い男性が2人。一人は細身で椅子に座りながら本を読んでいる。

もう一人は、筋骨隆々とした体格のいい男性。

そして最後に一人の少女。決して血色の良い顔色とは言えない青白い顔をしているが、その鋭い目つきは彼女が病弱で青白い顔をしているのではないという事の証明である。

「おい、イス。メビウス様が仰っていた使いの者とはまだ来ないのか？」

イスと呼ばれる少女が壁にかけられた時計を見て返す。

「時間ではもうすぐのはずよ。」

「あ、あのすいません・・・。」

部屋に響く聞き慣れない女の子の声。

声の主は部屋の入口に立っていた。

「貴方、どうやって入ったの！？ウェスター、ちゃんと結界は張ったの！？」

「う、ごめんなさい、ごめんなさい。殴らないで・・・。」

イスの声に怯える女の子。手にしていた熊の人形で頭を隠す。
そんな様子を見て、落ち着く3人。

初めに声をかけたのはウエスターと呼ばれた体格の良い男だ。

「お前はメビウス様が仰っていた使いの者か？」

「は、はい。えっと、メビウス様からの伝言を持ってきました。」

そう言い、ウエスターに近づき、熊の人形を使って手紙を渡す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1541q/>

スーパーヒーロー & ヒロイン大戦 I F ~ S H H W I F ~

2011年11月16日11時26分発行